

平成11年12月24日第三種郵便物認可（毎年1.3.6.9月の1日発行）平成27年9月1日発行 第134号

# 曹洞禅グラフ

一仏両祖の教えを今に伝える

SŌTŌZEN  
GRAPHICS

No.134

2015

秋 彼岸

宗教者として  
被災者に寄り添う

金田諦應 臨床宗教師養成にあたって思うこと

—カフェ・デ・モンの創立者が語る実践宗教学講座について、岡部医師について

# ころころと ころがる心 どうするか

## 大藪正哉

おおやぶ・まさや  
1932年、東京生まれ、1959年、東京教育大学大学院修了、筑波大学助教授を経て1977年、筑波大学教授、1995年、退官。駒澤女子大学講師、東京医科歯科大学講師、曹洞宗審事院委員などを務め、現在、東京天徳院住職、筑波大学名誉教授。

私どもは、誰もがいろいろな思いを持っています。この思いを「心」と呼んでいきます。十人十色ですが、心はころころところがっています。

さわやかな心もあれば、あわてる心もあります。苦しむ心もあれば、楽しい心もあります。さまざまな心がありますが、私の勝手な思いでは、

### —— さわやかな心 ——

でいたいものと思っておりますが、なかなか思い通りにはいかないことが多いようです。

### —— 下手の考え休むに似たり ——

という言葉があります。私の考えも下手の考えではありますが、自分としては、さわやかな心になるために、かなり役に立っているように思っていますので、自分としては内心忸怩たる思いはありますが、お役に立つこともあるかも知れないと思ひ、自分の愚かさをさらすことになりましたが、申し上げてみたいと思います。それはどんな時でも

### —— あわてないこと ——

を考えるようにしています。

### —— その具体的な方法は ——

### —— ゆっくりと呼吸する ——

ことにしております。ゆっくりと息を吐き出し、ゆっくりと息を吸いこむことにしています。ゆっくりと呼吸をすることによって、



ほどの歩くトレーニングが

### —— さわやかな心 ——

のために、最上の方法であると思ひます。

この歩くトレーニングをするときに、是非気を付けていただきたいことは

### —— 顎ひいて、背筋のばして歩きます ——

ということです。これを実行してみると、

### —— 視野が広くなって、ころぶ危険が ——

### —— かなり少なくなります ——

私どもが、ほとけさまにお参りをするとき、合掌して、ほとけさまのお顔をしっかりと拝見しております。いろいろなほとけさまがおられます。

### —— お釈迦さま、お観音さま、阿弥陀さま、 ——

### —— お地藏さま、お不動さま ——

どのほとけさまも

### —— 顎が出ていません ——

これは、ほとけさまが

### —— 顎を出してはいけません ——

と教えて下さっているのだと思ひます。

### —— 顎ひいて、背筋のばして歩きます ——

を実践していただきたいと思います。この実践によって

### —— 楽しい気分 ——

が湧き上がってきます。そして

### —— さわやかな心 ——

を実感することができます。

### —— あわてない ——

という思いが湧き上がってくるようです。

### —— ヒントになったのは ——

### —— 親が死んでも食休み ——

という言葉です。

### —— あわてない ——

### —— あわてない ——

と繰り返し、繰り返し、自分に言いかけせることにしております。

あわててころんで骨を折ったら、人生は

### —— 元も子もない ——

ということになるかも知れません。そこで、あわてないために留意することは、

### —— ゆとりを持って、事を始める ——

ということ、そのためには

### —— 早寝早起き ——

を実行した方がよいようです。早朝の三十分

カフェ・デ・モンクの創立者が語る  
実践宗教学講座について、  
岡部医師について



かねだ・たいおう  
昭和31年4月12日生まれ  
通大寺住職  
駒沢大学大学院修了  
東北大学大学院 実践宗教学寄附講座 運営委員長  
日本スピリチュアルケア学会会員  
カフェ・デ・モンク主宰

宗教者として  
被災者に寄り添う

東日本大震災から早四年が過ぎました。この震災では自分自身が学んできた宗教的フレームが壊れたという体験がありました。剥き出しになった「生と死」「喜怒哀楽」の現場には学んできた教義や宗教的言語では対応できないものが次から次へと出てきました。壊れたフレームの中をどうやって歩けばいいのか、宗教心とか霊性（スピリチュアリティ）というものは一体何なのかと問いと答えを繰り返しながらの活動でした。

鈴木大拙師は「日本の霊性」という著書の中

れる「救い」ではなく、その人の文脈の中で語られる「救い」なのです。

津波で亡くなった父親が作った花壇。三年ぶりに花を咲かせたのを見てここで父親と共に生きていく決心をした若い女性。妻、娘、孫を津波で失い、新盆に流した三個の灯籠が風と波にもまれバラバラに流れる。



岩屋寺でのカフェ・デ・モンク活動

しかし遙か沖合で一つの灯りになったのを見て、あちらの世界で三人一緒に暮らしていることを確信した老人。

人間には大きな命の輪の中にアクセスする能力（スピリチュアリティ）が元々備わっていると感じます。宗教者はそれをひたすら信じ、時間と空間が凍り付き未来への物語が見えなくなってしまう方々の心を解きほぐす。上手に聴きながら、気づいてもらおう。行きつ戻りつ長い時間がかかるかもしれません。その人が自分自身で受容するのをじつと待つ事が必要なのかもしれません。

教えを上手に説くというのではない。宗教者として寄り添うということはこういうことなのかという「気づき」はむしろ活動を通して教えて頂いた様に思います。その時すでに「ケアさ

で「一般に理解している宗教は、制度化したもので、個人的宗教経験を土台にして、その上に集団意識的の工作を加えたものである（中略）そしてそれは必ずしも宗教経験それ自体ではない。霊性はこの自体と関連している」と語っています。私達が平常に考えていた宗教的フレームの遙か違う次元に、長い間培われてきた「日本の霊性」があるのではと感じております。

今回の様に私たちの住む風土が危機的な状況に置かれたとき、その土地が持つ精神風土から生まれ、そして無意識に意味づけされてきたものが傷ついた心をケアしていく、そういう現場を多く経験しました。それは宗教的な文脈で語られる人・ケアする人」の関係

を越えているのでしょうか。ある時、若い女性から震災で亡くなった方々の霊が身体に入ってきて怖い、死にそうだ、自殺したいという悲痛な訴えがありました。その場合、まず霊を見るといつかという視点から考える必要がありそうです。仏教や、キリスト教ではこの様に解釈しているとか、実証科学の視点から霊が「ある・ない」という議論に入っていくと、実際答えが全く出ない問題です。教学や科学の理論で満たすに切った切った、教学や科学の自己満足にはなるかもしれないけれども、彼女の生きる力にはつなげていかないでしょう。彼女が語る出来事の背景にどの様な物語があるか、どのような状態に戻せば通常の生活に戻れるかを彼女中心に徹底的に考える。必要とあれば、

「ケアされる人・ケアする人」の関係  
越えているのでしょうか。

彼女の精神的背景（宗教的）背景を考慮しながら宗教的ケアを行う。その女性とは六カ月近く関わり、現在では普通の生活をしておりです。一瞬のうちに多くの方々が犠牲になった被災地では幽霊を見る、亡き人の姿を見ることが

とで日々の生活に支障がある人たちが沢山おりました。病院に行ったら「病氣」にされます。おそらく何かの病名をつけられ、薬を処方されて、そのまま悶々とした暮らしをしていくことになるでしょう。しかし時にはお医者様に診てもらいなさいとアドバイスをする場合もあります。ですから注意深く傾聴しそして見極めていく事が大切であり、そして医療者やその他の職種とのチームワークが必要であると感じます。



在りし日の岡部健医師

### 看取り先生・

### 岡部健医師のこと

震災後、東北大学文学部宗教学科が事務局となり、宗教・医療・福祉・学者関係の方々が集まって「心の相談室」が作られました。「カフェ・デ・モンク」も緩やかに連携しました。その中に私達の活動をじっと見ていた在宅緩和ケアの岡部健医師がおりました。先生は主に末期癌患者の在宅緩和医療に先進的に取り組んでこられた方です。残念ながら先生はご自身も癌に

患い、二〇一二年九月二十七日、六十二歳で亡くられました。岡部先生は在宅の看取りの中で、社会学者と共同して「お迎え現象」についての科学的データを集めておりました。お迎え現象というきわめて個人的な物語を、科学の手法を使って分析し、「迎え現象」を終末期医療の大切な出来事として位置づける試みをされました。

お迎えというのと、これまでいわゆる医学的な譚妄状態とされ、真正面からは受け止められなかった経緯があります。ところが先生は、そういう現象が実は人間の死に向かつていくときの魂の痛み（スピリチュアル・ペイン）を和らげてくれる仕組みとして体に刻み込まれているのではないか、そう位置づけようと思われました。

それは二〇一二年八月二十九日NHK「クローズアップ現代」で取り上げられました。先生はその番組に出演する予定でしたが、すでに体力が衰えていたため、東大名誉教授大井玄先生がピンチヒッターとして出演されました。岡部先生が亡くなる一ヶ月前の事です。大井

先生が岡部先生のところへご挨拶とお見舞いに来られるという事で、私と高橋悦堂師が岡部先生に呼ばれて同席しました。高橋悦堂師は「カフェ・デ・モンク」で一緒に活動をしていた宗侶です。先生はご自分の死に向き合いながら私達の活動に

真つ暗闇に落ちていくと言われましたけど、  
今、何色が見えますか

同行し、苦しみ悩みなながら「生と死」に向き合っている様子を見ておられました。先生は私達に、「これからは若いお坊さんたちが死に臨む場所（看取りの現場）にいてはいけない。だから金田君、おれの最後の臨終の儀式をやってくれ。」悦堂師には、「おれは間もなく死ぬ。僧侶としておれの死にざまを見ていくれ」ということを言われました。

悦堂師はそれからずっと先生の自宅に通いました。最後の十日くらいは泊まり込みになったと思います。私は常に車に法衣を用意しておりました。悦堂師から「今日、逝かれるかもしれません」と連絡があります。すぐに駆けつけてみると、先生はベランダで煙草を吹かしておられます。「先生、お迎えはまだですか」と聞くと、「いやあ、来ねえな」と。「どうですか、風景は先生は真つ暗闇に落ちていくと言われましたけど、今、何色が見えますか」、「グリーンだな、自然だよ」。この様な本当にぼつぼつとした会話が数回続きました。

そして最後の日が来ます。私は東北大会議をしておりました。悦堂師から「先生、今は安定しています。医師も社会福祉士、介護の人も帰りました。私も自坊に着替えを取りに帰ります」という連絡を受けました。私も大学での会議の後、自坊に帰りました。そして先生は皆が帰った一時間後に逝きました。奥さんがまな板をとんとんと叩いて夕食の用意、息子の耕君が夜の介護のためにシャワーを浴びていた。そのまな板の音とシャワーの音を聞きながら逝ったのです。あれほど臨床宗教師とか、チーム医療とか言っていたのに、亡くなるときは家族だけだったのです。でも考えてみれば、それは理想的な亡くなり方かもしれない、それが人間岡部健のダンディズムかもしれないですね。見事でした。

### 臨床宗教師養成に 余命をかける

先生が癌の告知を受けたのは二〇一〇年、大震災の前の年です。「高い山のやせ尾根を歩いているような気持ち」と、先生はその頃の心境を書いておられる。実際に自分は今生の中にいて色々と考えている自分がいる。けれども、死というのは何だろうか。そこには全く道標が見えない、暗闇に落ちていくようだ。先生の中で信念とか心情とか変化していき、死に行く人に



とつての道標が欲しいと考えるようになっていた。そういう最中、三月十一日の大震災が発生したのです。

震災では岡部医院の職員さんも死んでいます。その職員は自分の受け持ちの九十幾つの人をケアしていた。「地震になつて津波が来ると、そのまま逃げればいいのに、あいつ、また患者のところに戻つてその患者を二階に上げて、そのまま自分は流されたんだよね。なんでこの子は死んだのか」、そういう問いかけが先生の中で始まる。一体、人間というのは何なんだ、ああいう瞬間には、自分の命も人の命もないような、そういうところに、ぱつと行つてしまうのではないか。そういう考えがだんだん深まつていったようです。

もともと先生はタナトロジー研究会というものを主宰しておられた、死についての学問です。人間の死をどのように考えるか、おのれの死、他人の死をどう迎えるかについての学際的な研

究で、哲学者や倫理学者、宗教学者、お坊さんも含めて三十人くらい集まつていたでしょうか。その研究会での経験や自分自身に迫り来る「死」、

大震災での出来事を通し死の側からもう一回価値観を組み立てるといふか、死という最終点から文明を見ていこうという、そのような考えに行き着いたと思います。

緩和医療の経験から、医学には限界があるということに気づいておりました。例えば霊的（心の）悩み、そういう分野に医者是对応できないのです。医者としての限界を知ったことで医療と宗教の間の大切なつなぎ役としての臨床宗教師がいたら、医療現場は助かると先生は考えた。なぜかといえば、宗教者は看取りの負のエネルギー、死に向かうエネルギーを祈りの力で自然界に、大きな命の中に拡散させていく力を持つていると、宗教者が被災地で活動する様子を観察し、そして確信したのだと思います。

臨床宗教師の構想は震災後まもなく口にして



戸倉海岸での大震災49日追悼

おりました。「でも先生、ちよつとそれは早いな」と申し上げました。まず被災地の支援が第一でしたし、それに資金の用意、大学とのコンセンサスも出来ていない。しかし考えてみたら、先生の命は本当にわずかしが残つていなかった訳で、在宅医療の先駆者として看取りの現場で宗教者とタッグを組む。この仕事を終えて生から死に向かいたかつたのだと思います。

## 東北大学実践宗教学 寄附講座の開設

私たち僧侶のように代々同じ土地で活動している者は、地域文化だとか地域のスピリチュアリテイというのでしょうか、あるいは固有の死生観というものが言葉で表現できないほどに体の中に染みついていると思います。幽霊を見たとか、お迎えが来たとか、どのお坊さんも経験したり聞いたりしていると思います。

死に向かっているおばあちゃん。「おじようさん実はさ、最近何年も前に死んだじいちゃんが出てきて何かしゃべつていたんだ。なに言っているかよく分からなかったけど」そのとき、「よかつたね。じいちゃんがあつちの

世界ではあちゃつてつかもしれねえから、ちゃんと綺麗にしていかなくちやな」みたいな感じでやるじゃないですか。そういうことを穏やかに言えるのは地域に根差した宗教者しかいません。看護師さんとか福祉の人ではできないことです。そうやって地元のお坊さんに手を握られたら、死にゆく人はもちろん、家族も安心するでしょう。そこが岡部先生の欲しかったところなんです。宗教者は霊的ケアのプロであると、それを先生なりに認めてくださった。

ただし、これは特定の地域社会の中ではそれで済みますが、臨床宗教師というのはホームグラウンドだけでなく、アウェイにも出ていかなければならない。また異業種である医療関係者や福祉関係と組むということを前提する以上、連携の仕方（ルール）を学ぶことが必要です。

そこで臨床宗教師の養成プログラムを作成する為、キリスト教の臨床牧会教育の歴史、あら

そういうことを穏やかに言えるのは  
地域に根差した宗教者しかいません

ゆる分野のチャプレンの働き、医療チームの一員として関わる様々なスキルの研究、その現場での役割を創造できる感性の開発、更に布教活

動と一線を引くための倫理綱領の作成、現時点で想定されるあらゆる研修分野について検討し、大震災の翌年四月、東北大学大学院文学研究科の中に、「実践宗教学寄附講座」を設置し、同時に臨床宗教師の研修がスタートしました。但しこれは完成されたプログラムではなく、研修を進めながら同時に日本の社会制度・宗教界の状況を研究しながら少しずつ変更を加えて発展させるものです。

三年間という期限の限られた講座でした。幸い二年の延長が決まったところです。この三年の間、六回の臨床宗教師研修を行い、のべ九十名の宗教師が研修を受けました。彼らはいま各地で活動を始めています。ただ寄附講座ということで、お金が集まらないことには存続できません。様々な分野の方々に寄付を募りに歩きました。実績も少なく海のものとも山のものとも

もつかない講座に資金を提供してくれる組織・団体は本当に少なくて、何とかやりくりしているというのが現状です。

しかしながら、医療界や福祉関係の方々からは私たちの期待以上に賛同の声を寄せて頂いております。確実に日本社会は新しい宗教の動きに注目しているのを感じます。

命を賭して実現を夢見た岡部健医師。そして東日本大震災で亡くなった二万人の方々への想いが浄財となって世界中から寄せられました。その浄財に支えられている寄附講座です。この講座が更に続くことを切に願ひ、各方面からのご支援をお願い致します。

ご寄付のお申し込みについては東北大学文学部・文学研究科会計係までお問い合わせください。  
Tel 022-795-6007 Fax 022-795-6086  
art-kaik@bureau.tohoku.ac.jp

「ラジオ カフェ・モンク」を5名の方にプレゼントいたします。仏教企画(裏表紙の住所)まで、お名前・ご住所・電話番号を明記のうえハガキでご応募ください。  
平成27年11月末必着



出版発行 心の相談室  
定価 1200円(税込)

読者プレゼント

曹洞禅グラフ132号(春・彼岸号)プレゼント  
鈴木包一老師の色紙は次の方が当選されました。

静岡県/植田恭一様 愛知県/大沼仙恵様  
茨城県/滑川敏雄様 長崎県/吉永由起子様  
静岡県/切畑淳子様

お便り募集

身近な人との心温まるふれあいや本誌への感想、仏教についての質問などを600字以内でお寄せください。Eメールでも受け付けております。

送り先.....〒252-0113 神奈川県相模原市緑区谷ヶ原2-9-5-5 仏教企画編集部  
Eメールアドレス.....fujiki@water.ocn.ne.jp

読者からのお便り 吉永由紀子様

西館先生の「大きな愛の国母」大変共感をもって拝読致しました。国母の大いなる愛に抱かれて、私達は幸せな国民ですね。

# 毎日書道

高橋秀榮

光陰は矢よりも迅かなり身命は露よりも脆し何れの善巧方便ありてか過ぎにし一日を復び還し得たる徒らに百歳生けらんは恨むべき日月なり悲しむべき形骸なり設い百歳の日月は声色の奴婢と馳走すとも其中一日の行持を行取せば一生の百歳を行取するのみに非ず百歳の佗生をも度取すべきなり此一日の身命は尊ぶべき身命なり責ぶべき形骸なり此行持あらん身心自らも愛すべし自らも敬うべし我等が行持に依りて諸仏の行持見成し諸仏の大道通達するなり然れば即ち一日の行持是れ諸仏の種子なり諸仏の行持なり

## 作品集

ご家族のみなさまの応募をお待ちしております

お手本を参考にして、作品を半紙(横向、お名前は左側)に書いてご応募ください。(無料)ご応募の中から優秀な作品を選び、年に1度誌上で発表し、記念品を贈呈します。住所、氏名、電話番号を明記して作品をどしどしお寄せください。

送り先 〒252-0113 神奈川県相模原市緑区谷ヶ原2-9-5-5 仏教企画 ☎042-703-8641

締切 平成27年11月末

たかはし・しゅうえい  
昭和十七年北海道生まれ、  
駒澤大学仏教学部卒業、  
同大学博士課程修了、元  
神奈川県立金沢文庫長。

# 『徒然草』と 仏教のおしえ

## 諸行無常のおしえ

仏教の思想を特徴づける三つの基本的な主張を三法印さんぽういんといい、それは「諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜」とされる。このうち諸行無常とは、あらゆる現象はすべて移り変わってとどまることがないことをいう。

『徒然草』には、第四十九段に「人はただ、無常の身に迫りぬることを心にひしとかけて、つかのまも忘るまじきなり」、第五十九段に「命は人を待つものかは。無常の来たる事は、水火の攻むよりもすみやかに、逃れがたきものを」とあり、そして第三百三十七段に「鳥部野・舟岡さらぬ野山にも、送る数多かる日はあれど、送らぬ日はなし。されば、棺をひさぐ者、作りてうち置くほどなし。若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期しじなり」と警告するのである。

## 勸善懲悪のおしえ

中国の唐の時代、白楽天がある禅僧に仏教とはいかなる教えかを訊ねたとき、禅僧の答えは「諸悪莫作、衆善奉行、自淨其意、是処ぜしよ仏教」というものだった。意味は、悪をなすことなく、善いことを行って、自己の心を浄める、これが諸仏の教えである、と。白楽天は、こんなことなら三歳の子供でも分かることではないか、という、三歳の子供でも分かるが、八十歳の老人でもできないだろうとたしなめられたという。

日常生活で、どういう言動をなすべきか、なすべきでないか、『徒然草』では多くの例を挙げて説明する。第六十七段に「人としては、善にほこらず、物と争はざるを徳とす。……一道にもまことに長じぬる人は、みづから明らかにその非を知る故に、志常こころじょうに満たずして、終に物にほこる事なし」。第七十段「さしたる事なくて、人のがり行くは、よからぬ事なり。用ありて行きたりとも、その事果てなば、とく帰るべし。久しく居たる、いとむつかし。……その事となきに、人の来たりて、のどかに物語して帰りぬる、いとよし」。

そして第二百三十三段「よろづのところがあらじと思はば、何事にもまことありて、人を分かずうやうやしく、言葉すくなからんにはしかじ」、

## 河崎清作



兼好法師画像(常栄寺所蔵)

## 慈悲のおしえ

歴史上の四大聖人の一人とされる釈迦は慈悲を説いた。『徒然草』百二十八段では「大方、生ける物を殺し、いため、たたかはしめて、遊び楽しまん人は、畜生残害のたぐひなり。よろずの鳥獸、小さき虫までも、心をとめて有様を見るに、子を思ひ、親をなつかしくし、……身を愛し、命を惜しめること、ひとへに愚痴なる故に、人よりもまさりて甚だし。彼に苦しみを与へ、命を奪はん事、いかでかいたましからざらん。すべて、一切の有情を見て、慈悲の心なからんは、人倫にあらざ」と。

次の百二十九において「すべて、人を苦しめ、物を虐ぐる事、賤いやしき民の志をも奪ふべからず」と、人の心を思い、慈しむことの大切さを説いている。

何事にも誠意をもってあたり、人を差別せず、礼儀正しく、余計な口をきかないのがよいというのである。

## 少欲知足のおしえ

仏教では執着を離れ、欲望を抑えることを説く。『徒然草』第二百二十三段に「思ふべし、人の身に止むを得ずして営むところ、第一に食ふ物、第二に着る物、第三に居る所なり。人間の大事、この三つには過ぎず。……医療を忘るべからず。薬を加へて四つの事、求め得ざるを貧しとす。この四つ欠けざるを富めりとす。この四つの外を求め営むを奢おごりとす」。

この具体的な例が第二百二十五段に語られている。兼好法師の知人、平宣時のぶときの話として、宣時が若いころ最明寺入道さいめいみょうじ(北条時頼)に呼ばれる。着ていく物がないと悩んでいると、使いが来て、そのままよいと、そこで普段着で訪ねると、一人で飲むのがさびしいから呼んだのだと、時頼は、銚子ちやうしに粗末な器をもって出てきた。何か肴になるものがないか、宣時にそこらへんを探してくれというので、彼は隅々を見て回る、台所の棚にちよつと味噌のついた小皿があった、こんなものがありますという、時頼は「事足りなん」と、心よく盃をかわしたという。

(引用は新潮日本古典集成『徒然草』による)

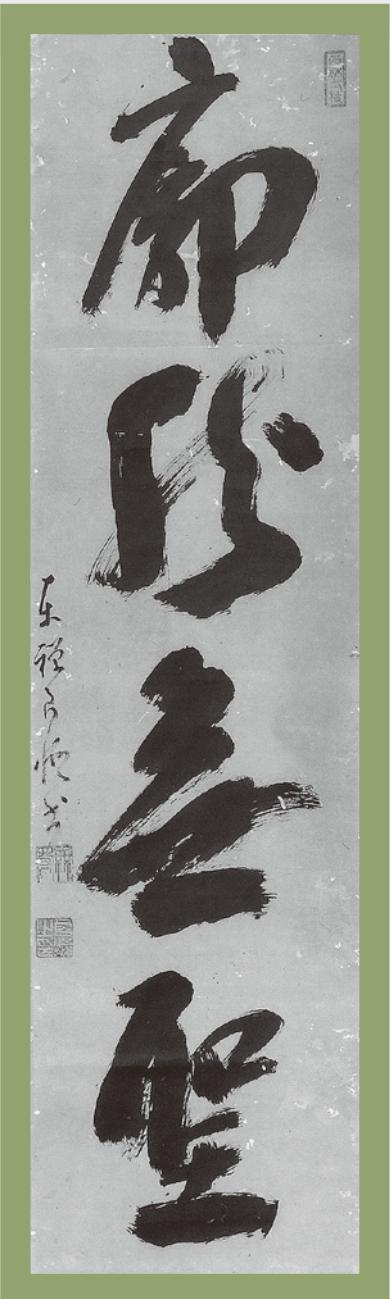
# 廓然無聖 雨過夜塘秋水深

秋の彼岸を迎えると私は思い出したようにこの二軸を順番に掛けます。  
まず「廓然無聖」です。

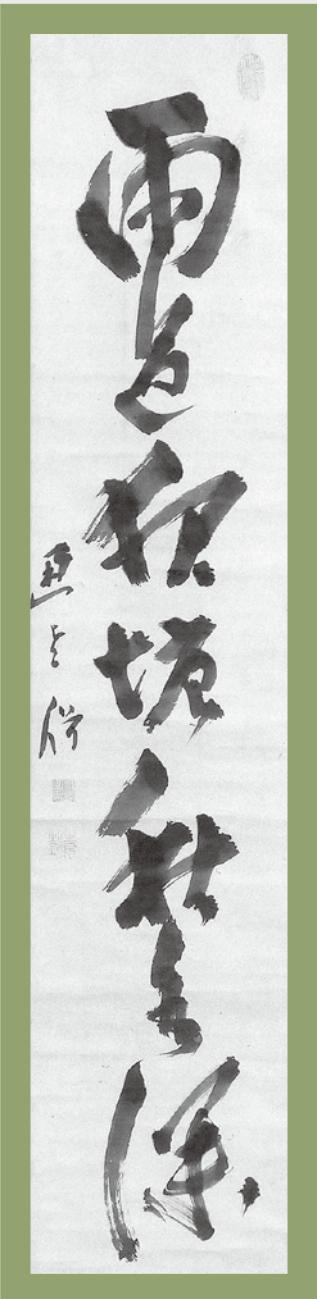
六世紀に印度から中国にこられた

達磨大師と梁の武帝との会話に出てくる達磨大師の言葉です。

「廓然無聖」とはからりと晴れた、澄みきった秋空を思い浮かべて下さい。



無得良悟 書



大内仏通 書

世の中に存在するもの、特に自然界を尊いものとして頂くのです。  
自分、他人、自分のものという思いがない境地です。

これを書いた無得良悟（二六五—一七四二）は黄檗宗に参じたせいか、

その書体は隠元・木庵・即非に一脈通じています。

肉太でゆつたりと正に「廓然無聖」そのものです。

主な住地は大寧寺（山口県）です。

弟子も六十二人を数え、無得下とよばれ、書を大変尊重しました。

次は「雨過夜塘秋水深」です。碧巖録という禅の書物に出ています。

これ又、大自然を仏と見ます。

しかし、私達は仲々、気がつきません。

大自然の説法は、ある時は美しく高尚、ある時は厳しく、荒々しいものがあります。

この書は雨が降ったあと、川の水が増して深くなったと。

あたり前のことの外に真実はないといいきっています。

大円仏通（不詳—一八二五）の書です。

光明寺開山（兵庫県）で「虎仏通」とあだ名されました。

厳しい指導者だったようです。

淡墨で書かれ、筆の起こりをしっかりと力強く入り、

ごつごつとして見るからにとつきにくい書です。

岩をきり裂くような鋭さを感じます。

仏通は「通上座」「通老僧」と認めているのが多いようです。

（ともに正泉寺所蔵）

よしおか・はくどう

昭和十七年九月二十七日静岡県生まれ、駒澤大学仏教学部卒、永平寺僧堂研究科修了。現在静岡県藤枝市文化財保護審議会会長、禅文化・洞上墨蹟研究会会長、正泉寺東堂。

湯川れい子  
私の人生、  
いつも音楽があった

聞き手 西館好子

REIKO YUKAWA

## 第2回

### 女性ジャズ評論家の誕生

#### 冗談にまぎらした兄の最後の思い

西館 当時、女優志望でいらした湯川さんのこと、お母さんにはどういうふうに映ったでしょう？

湯川 母としては当然不安だったと思います。いつも二言目には、とにかく結婚してね、でしたから。幸福な結婚をするのが女性の幸せだから、だから若いうちに赤ちゃんを産んでほしいとか、それが母の望みだったと思うんです。

でも同時に、母は自分が手に職がなくて、私を育てるのに本当に細かい思いをしましたから、女性もいざという場合、夫と死に別れたりしたら、子供を育てるぐらいの経済力は持つてほしいと。だからあなたも手に職を付けないさいと言われて、私は高校を卒業して、二年ぐらい洋裁学校に通ったんです。

西館 洋裁で身を立てようよと。

湯川 いえ、何かのときのために、一応スーツくらいは縫ったりはしたんですけど。母にとっては、はバリバリの軍人を目指して一生懸命勉強したのに、長男は米沢の祖父母のもとでのんびり育って、アコーディオンが好きで、乗馬が好きで、母からみるとちょっと情けなかったんじゃないかな。

西館 戦後になって、変わってきた。

湯川 はい。後悔していたようです。私が母に、上の兄が戦場に行く時、最後にお母さまに何と書いて出ていったんですか？

あの子は、最後の最後まで冗談を言って出ていったのよ

女優なんていう商売は河原乞食でしたから。それはそうでしょうね。

湯川 信じ難いけれど、母の妹やそのご主人とか、親族が何人か集まって話し合っていました。ちょうどそのころ、久我美子さんが出てこられた。

西館 あの方は侯爵家の出ですね。

湯川 ああいう、世が世ならば……という人が今は女優さんになる時代だから、どうしても私がそういう仕事をしたいというのならいいんじゃないかと、親族のお墨付きをいただいて独立プロの女優になったわけです。最初に山田五十鈴先生のところへ伺った時は母も一緒でした。それで、独立プロに二年間ぐらい預けられた。

西館 やっぱり末っ子には好きなことをさせてやりたいと、甘かったわけでしょうか。

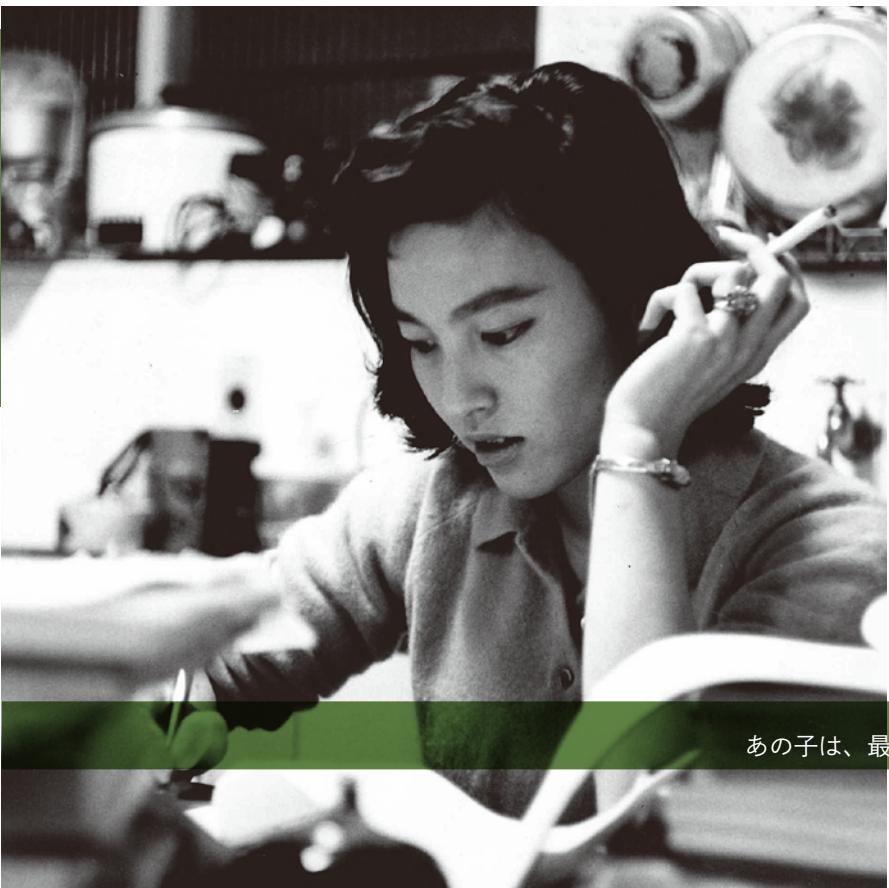
湯川 そうですね。どこかで母は、あんなに絵が好きで、音楽が好きだった長男のことを、戦争中は情けなく思っていたようなんです。次男

ばかなことを言って、あの子は、最後の最後まで冗談を言って出ていったのよ、と。玄關で靴を履きながら、もし僕が髪の毛縮れた真つ黒な、目のくりくりとした子供を連れて帰ってきて、その子が、ばばちゃま！と言っても卒倒しないですね、というのが兄の最後の言葉だったといえます。

でもそれは、兄としたら自分がどこの戦地に行くか、もう分かっている、フィリピンで死ぬんですけれど、南洋に行くことは分かっている、それもしっかり言えなかった。兄のモチベーションとしては、一度は行きたかったヤシの実は流れてくるところ、という思いがあった、それがせめてものことだったのでは、と母に言ったんです。兄としては、せめてもの言葉だったと思います。でも、母はそれを本当にばかな冗談だと思ったんじゃないかな。

#### ダンスホール金馬車での出来事

西館 それから、ジャズとの出会いははじまるのでしょうか。湯川 ええ、そのころ現代俳優



家のキッチンで原稿書きしている姿



「スウィングジャーナル」に原稿を書き始めた頃

協会の事務所が銀座にあったので、そこへはよく顔を出していました。お仕事のこととか、勉強に行ったりしていたんですけど、今のデパートの松屋近くに金馬車というキャバレーがあって、金馬車の前を通って松屋の先をちよつと築地のほうに曲がったところにその事務所があったんですね。金馬車は夕方の五時四十五分ぐらいまでダンスホールになる。

西館 当時はダンスホールはブームで流行しましたものね。

湯川 そう、ちょうど日本にマンボが入ってきたころです。細いマンボズボンの若者たちが沢山五〇年代の終わりで『太陽の季節』のころ、私が高校二年とか三年の時です。現代俳優協会の新人女優四人のうちの一人が築地の有名な老舗のお嬢さんで、当時最先端のファッションモデルという、そういう仕事もしている八頭身の美人でした。その人とよく一緒に事務

君は本当のジャズを聴いたことがあるのか、と言う

所に行っていました。彼女がちよつと踊らない？ と私を金馬車に連れて行ったんです。忘れもしません、浜口庫之助さんと東京キユーバン・ボーイズがステージに出ていて、ハマクラさんが歌っていました。そこで私はダンスも知らないし、そんなところに入るのは初めてで、白いテーブルか何かに座っていたら、男の人が、踊らない？ と私を誘うんです。彼に付いて一緒に何とかマンボを踊ったり、ジルバを踊ったりして、その人と話をしてる時に、君は何をしているの、というから、独立プロの女優だと。『太陽のない街』とか『蟹工船』の話になって、進駐軍の政策で末端神経をしびれさせるような、こんなジャズなんか夢中になっていいのかしら、というような話を私がしたのね。

高校生の、もう本当に頭でっかちの、生意気盛りでした。私はスタニスラフスキー・シ

### モダンジャズの洗礼を受ける

STEMの教えなどを受けて、俳優というのは思想の伝達者だと堅く信じていて。それで私は思想の伝達者としての影であっていいと、だから今井正先生の作品だったら、路傍の死体でもいいから使ってくださいみたいな。そんなふうでしたから、結構独立プロのそういう色に染まっていた、マンボズボンをはいたお兄さんにそんなことを言ったんです。

そうしたら彼が本当に顔色を変えるぐらい真剣な顔をして、ジャズっていうのはそんなものじゃない。ジャズはアフリカから強制的に連れてこられた黒人たちが、血や汗や涙で作りに上げた、アメリカが生んだ唯一の芸術なんだ。君は本当のジャズを聴いたことがあるのか、と言う。びっくりして、ないと言ったら、じゃあ聴かせてあげるからおいで、と本当に引張って行かれるようにして、有楽町の駅前にあったコンボという小さな四畳半ぐらいの小汚い店に連れて行かれたんです。

湯川 ガラス戸を開けて入ったら、バリバリ耳をつんざくような音で、入り口のガラスの窓にはハイ・ファイ・セットと書いてありました。

初めて三十三回転のLPが出たころです。お店に入ったら、ずらっと黒人の人たちが座っていて、みんな夢中でジャズを聴いています。私がそれまで聴いたことのない音楽が流れていて、その彼が、これがジャズだと。今ニューヨークとかシカゴで新しく生まれている、即興演奏を主体にしたバップというモダンジャズだと言うんです。

ジャズの生命は即興演奏であり、白人のために、ダンスを踊るためにやっている演奏がジャズだと思ったら大間違いだと言う。えー、そうなんだと、そこで初めて私はモダンジャズの洗礼というか、ノックアウトを受けてしまった。ジャズにも、その男の子に夢中になるのも時間の問題、すぐ夢中になってしまう



んですけど、彼が一生懸命私にそうやってジャズを教えてくださいました。ちよつど生まれて間がないモダンジャズを、私は夢中になって聴くようになるわけです。その小さなお店、本



にしだて・よしこ  
東京生まれ、劇団こまつ座・みなと座、リブ・フレッシュを設立。日本子守唄協会理事長、遠野市文化顧問などを務め、子育て支援に資するために活動中。  
<http://www.komoriuta.jp>

当に四畳半ぐらいのところには渡辺貞夫さん  
もいらしたし、秋吉敏子さんも来ていたし、  
大橋巨泉さんなんてまだ早稲田の大学生で、  
ほお菌の下駄を履いて腰に汚い手拭いをぶら  
下げていらしていました。まだみんな無名で、  
その後演奏家になったり評論家になったりと  
いう人たちが、米軍の兵隊さんが持ち寄って  
くるモダンジャズのレコードを聴いていたん  
です。それで私も独学で勉強するようになって、  
十九歳の時にジャズの専門誌「スイング  
ジャーナル」の読者論壇というページに投稿  
するんです。

西館 それが初めてのジャズ論。

湯川 はい。初めてでした。それが採用になって、  
湯川れい子というペンネームで出した私の原  
稿が読者論壇に二回ぐらい載った。それにフ  
アンレターがたくさん来たんです。名前から  
女が書いていることは明らかですから、若い  
女がジャズについて勢いのいい文章を書くな  
んて、まだ本先に先端のことだったんでしょ  
うね。それもまた小生意気な文章で、そんな

それでラジオの番組も持って、半年か一年た  
つころには週に二、三本担当していました。  
それだけじゃなくて、五三年に日本テレビが  
開局します、六〇年ぐらいにはフジテレビが  
出来たのかな、ちょうどそのころ、ラジオの  
番組がテレビに移行しちゃうんです。ラジオ  
のほうは予算がなくなって、そんなにスター  
をそれまでみたいに使えなくなるんですね。  
だから、自分でレコードもそろえて、自分で  
しゃべるといのは希少価値というか、便利  
だったんでしょうね。

大橋巨泉さんとか青島幸男さんとか、それ  
まで構成作家だった人たちがご自分でしゃべ  
るようになった。そんな中で、私みたいにプ  
レスリーからパット・ブーンから、五〇年代  
のポップスからと聴いている人はあまりいな  
かったからでしょう。自分で苦労してレコー  
ドも集めていましたから、そういうものを自  
分で全部構成してしゃべっていたんですね。

西館 まだ二十代のことですよ。

湯川 はい、そうです。

西館 いい時代でしたね、考えたら。パイオ  
ニア的存在で出発できたんですね。

湯川 ですから、本当に苦労したということ  
がないんです。日本でテレビが茶の間  
に入ってきたのは、東京オリンピック  
からで、ちょうどその同じ年に、ビー  
トルズが世界デビューしています。若

ジャズの聴き方は間違っているとか、生意気  
なことを書いていたんです。そうしたら、も  
う亡くなられましたけれど、やがて有名なジ  
ャズ評論家になられた岩浪洋三先生が、その  
ころまだ二十五歳ぐらいの同誌の編集員で、  
うちに電話がまだないころに電報をください  
ましてね、一度お目に掛かりたいといってこ  
られた。

それで新橋の編集部までとことこ行ってお  
会いしたら、君、本気で書かないかいと言わ  
れて、もう二つ返事で書きます、と。

西館 そのジャズ評論が音楽評論家への入口になっ  
たわけですが、作詞活動はいかがでしたか。

湯川 作詞はもつとずっと後で、それから五年くら  
いたってからです。

### プレスリーとビートルズ

湯川 もうそれからは、「マンハント」とか「ハヤカ  
ワ・ミステリーマガジン」とか「男子専科」と  
か、アメリカの「ダウンビート」の日本版とか、  
そのころの雑誌にどんどんジャズ・エッセー  
を頼まれるようになります。と同時に、今度  
はラジオのディスク・ジョッキー、DJをや  
りませんかと。

西館 当時、女性でそういう人はいなかったでしょ  
う。

湯川 ええ、まだアナウンサーの時代でしたから。

者がギターを弾いて歌って、それが社会的に  
認知されるようになったのは、日本ではビー  
トルズからです。その前のエルビス・プレス  
リーはラジオでしか日本に入ってきたんで  
した。プレスリーがロックンロールというも  
ので出てきて、アメリカに文化的な革命とも  
言えるような、黒人と白人の間の壁を蹴飛ば  
してしまうというようなことは、実は同時代  
に日本には入ってこなかったんですね。

西館 そうですね、ロックって何ですかと聞かれて、  
プレスリーは私の生き方だと答えたという、  
それはすごく印象に残っています。

湯川 ですからロックが認識されていなかったとい  
うことで、ビートルズが日本に来た時に、武  
道館を貸してもらえないという大事件が起き  
たんです。そのころは、エレキを聴くと不良  
になるとか、神聖な武道のための殿堂である  
武道館をロックなんかには貸すことはできない  
とか言われて大変でした。そこから教えてか  
ら、もう半世紀ですものね。(以下次号)



ゆかわ・れいこ  
東京生まれ、1960年ジャズ評  
論家としてデビュー、作詞家と  
しても活躍。1972年ころより  
音楽療法について関心を深める。  
NPO法人日本子守唄協会会長・  
日本音楽療法学会理事。

# お寺訪問記 五五〇回続 く 仏教講話会



神應院・西村英昭住職（広島県呉市）

呉市は古くから造船の町として名高い。その港を望むゆるやかな坂道の中ほどに神應院がある。

本堂前の境内では、大きな菩提樹の木陰で園児がのびのびと遊び、西村英昭住職が通ると「園長先生、おはようございませう」と園児たちの元気な声が響く。もともと広島市内にあったこの寺は西村師の祖父、二世悦玄住職の頃、呉に移った。西村師は語る。

「先々代は厳しい性格でしたが、交友関係も広く、眼蔵会を開いては澤木興道老師などをおよびしていました。老師は幾度もいらしたので、幼かった母が石けりなどで遊んで

もらったと聞いています。

先代の正俊師匠は空襲で焼け野原のなか、寺の再建のため海軍工廠から廃材を調達し、いち早く仮本堂を建てました。そして神戸の心月院で友松円諦師の講話が開かれるというので、当時のことですから汽車で七、八時間はかかったでしょう。お話を聞きに出かけ、大変な衝撃を受けたように、帰るとすぐ、ともかく友松師のお話を皆さんに聞いてもらおうと、さっそく講演の依頼をしたのです。講話会当日は、檀家のみならず近隣の人や他宗派のお坊さんも来られ、仮本堂に人があふれた。私も幼いながらその活況ぶり

を記憶しています。

戦後の国民の心が荒廃している時代、僧侶たちが漫然と過ごしておったのではないかん、僧侶として果たすべき責任がある、と言いながら先代は積極的に、各界の方々に講師をお願いしていました」

その顔ぶれは（以下敬称略）  
澤木興道、佐藤泰舜、酒井得元、内山興正、酒井大岳など宗門の方々の他、山田無文、松原泰道、西田天香、三上和志、小林慈海、内山鑑三、宮崎道安、花山勝友、金岡秀友、鎌田茂雄、武者小路実篤、セイロン駐日大使スーサンタ・デ・ホンセカ、無着成恭などなど。近年では大谷徹梵

（奈良薬師寺）、大村英昭（大阪大学）、池田魯参（駒澤大学）、石川洋（二燈園）、渡辺和子（ノートルダム清心女子大学）、青山俊董（愛知専門尼僧堂）、奈良康明（駒澤大学）、佐藤達全（育英女子大学）、角田泰隆（駒澤大学）、佐々木宏幹（駒澤大学）といった方々が講師陣に請われ、長年にわたり定月に話す講師も多いという。

「おのれのよるべ」を歌い、般若心経、三帰五戒を唱えたあと講師の話が始まる。用意された座卓でメモを取りながら熱心に聴く人も多く、終わりにには仏教讃歌「四弘誓願」を歌い締め括る。

寺で人生を学ぶのです。これは先代からの教えで、今でもわが寺の根幹とする考えです。多様なご講師をお迎えして、あらゆる角度から人の生きてゆく道を学んでいきます。ある講師から『人は皆、佛種を持つて生まれてくる』という言葉をいただきましたが、お寺は、自分の佛種を育てていく場としての道場でもあると思います」

人生の支えとなる仏教の智慧や教えを、誰でも聞くことができる講話会。「仏法を聴く会」として昭和二十四年に始まった会も、今年の九月には五五〇回を迎える。



神應院檀信徒の集い（左から佐々木宏幹、滝田米、奈良康明の諸氏）

した。講師の著書を以前から愛読していたので、生の声をお聞きできて感激。その後も通わせていただいています」「日常生活を坦々と過ごしていました。講師のお話にはハッと気づくことがたびたびです」と参加者。

## にしむら・えいしょう

1944年、呉市生まれ。1966年、駒澤大学佛教学部佛教学科卒業。同年、本山永平寺安居。1971年、駒澤大学大学院修士課程佛教学専攻修了。同年、神應院にて師寮寺補佐。2002年、神應院住職となり現在に至る。

737-0022  
広島県呉市清水2丁目1の26  
電話0823-21-4491  
<http://www.jinnouin.com/>

お寺訪問記	23	吳市 神應院 西村英昭
私の人生、いつも音楽があった2	16	湯川れい子
心に響く仏教のことは	14	吉岡博道
『徒然草』と仏教のおしえ	12	河原清作
毎日書道	11	高橋秀榮
臨床宗教師養成にあたって思うこと	4	金田諦應
ころころと ころがる心 どうするか	2	大藪正哉

表紙・大本山永平寺(撮影・岩佐和則)

長田 お寺でも実際にやっているところはあるんですよ。  
西館 はい、私も何度かお邪魔して拝見しております……そこでは、帰りにはみんな得手をつないで、仲良く帰って行く。  
長田 一緒にうたいながらね。  
西館 そうです、一緒にうたいながら手をつないで帰る、日本人の心の再生はそういうところから始まるのではないのでしょうか。  
本文より

## うたい継ごうよ、子守唄

長田暁二・西館好子対談集

仏教企画刊 定価 1,200 円

下記宛にハガキ・電話・FAX・メールにて

仏教企画

〒 252-0113 相模原市緑区谷ヶ原 2-9-5-5

電話 042-703-8641 FAX 042-783-0989

fujiki@water.ocn.ne.jp

お申込

